

『言語研究の世界——生成文法からのアプローチ』

読書案内

本文の理解を深めるために役立つと思われる文献を15の章、6つのコラム、2つの事例研究の著者に挙げてもらい、簡単な解説をつけてもらいました。生成文法を理解するためには広い視野と合理的な判断力を身につける必要があります。その意味で、読書案内に取り上げられている文献では、生成文法のアプローチに沿った具体的研究だけでなく、生成文法の考え方をさまざまな視点から検討できるような研究も紹介されています。

第1章 はじめに：なぜ言語を研究するのか (大津由紀雄・今西典子)

① Noam Chomsky (2016) *What Kind of Creatures Are We?* Columbia University Press.

チョムスキーの人間観を比較的わかりやすいことばで綴った4つの論考が収められているお勧めの文献です。とくに、第1章“What is Language?”はぜひ読んでみてください。なお、ノーム・チョムスキー(著)、福井直樹・辻子美保子(編訳)(2015)『我々はどのような生き物なのか』(岩波書店)はチョムスキーが2014年に上智大学で行った言語学と政治に関する連続講演の内容を日本語に翻訳したもので、最初の講演「言語の構成原理再考」は本書の第1章“What is Language?”と同趣旨の内容で、近年のチョムスキーの考え方を知ることができます。

② Noam Chomsky (1957) *Syntactic Structures*, Mouton. [福井直樹・辻子美保子(訳)(2014)『統辞構造論』岩波文庫.]

まずは本書のPrefaceの最初のページを読んでください。分析や理論構築における、明示性の重要さが理解できるはずです。短い文章なので、紙と鉛筆、それに辞書を用意して、腰を据えて挑戦してみてください。

第2章 言語知識の性質 (杉崎鉦司)

① Noam Chomsky (2004) *The Generative Enterprise Revisited: Discussions with Riny Huybregts, Henk van Riemsdijk, Naoki Fukui and Mihoko Zushi*, Mouton de Gruyter. [ノーム・チョムスキー(著)、福井直樹・辻子美保子(訳)(2011)『生成文法の企て』岩波書店.]

やや難解ですが、チョムスキーへの過去のインタビューと近年のインタビューを通して、チョムスキー自身によって生成文法の根本的な考え方やさまざまな側面について、深く広く述べられています。

② Robert C. Berwick and Noam Chomsky (2016) *Why Only Us: Language and Evolution*, MIT Press.

ミニマリスト・プログラムがどのように言語の起源・進化の問題に取り組んでいるのかについて詳細に議論されています。

第3章 言語の音とは：音声学・音韻論（田中伸一）

以下は順に初級から中上級へと配置しており、すべて生成音韻論に関する入門書・概説書です。

- ① 菅原真理子（編）（2014）『音韻論』（朝倉日英対照言語学シリーズ 3）朝倉書店。

各章で著者が異なる論集は玉石混交となるものですが、この書は全体の構成も良く粒が揃っており、編者の手腕が光っています。文レベル音韻論の入門は手薄なので、特にその章が貴重・有用です。

- ② 窪菌晴夫（1999）『日本語の音声』（現代言語学入門 2）岩波書店。

示唆に富む明解な解説書で、私自身もどれだけ影響を受けたか計り知れないくらい、面白さと魅力に溢れている本です。ようこそ窪菌ワールドへ、といった著者の声が聞こえてくるようです。

- ③ 田中伸一（2009）『日常言語に潜む音法則の世界』（開拓社言語・文化選書 10）開拓社。

音韻理論の基礎から最新の流れまでを追った解説書であり研究書。生成音韻論の歴史的展開と、なぜそのように展開したかの理由が一望できます。

第4章 語とは：形態論（長野明子）

- ① 西原哲夫（編）（2018）『言語の構造と分析——統語論，音声学・音韻論，形態論』（言語研究と言語学の進展シリーズ 1）開拓社。

「語彙素」「形態素」「語幹」「基体」「接辞」「機能語」といった形態論の概念についていちから知りたい人はこの本の第 III 部をどうぞ。複合や派生はもちろん、借用（borrowing）も扱っているまれな入門書です。本書『言語研究の世界』第 4 章の次に読むとよいでしょう。

- ② 西山國雄・長野明子（2020）『形態論とレキシコン』（最新英語学・言語学シリーズ 9）開拓社。

形態論の研究史と現代の形態理論を概観したうえで、英語と日本語で具体的トピックを解説した本です。本書『言語研究の世界』第4章と上の本の第III部を読んでからこれを読むと、効率よく形態論的ステップアップができます。

コラム1: **音と形態のインターフェイス** (石原由貴)

① **窪菌晴夫(1995)『語形成と音韻構造』** (日英語対照研究シリーズ3) くろしお出版.

日本語と英語の語形成とそれが音韻構造に及ぼす変化について、豊富な例を示しながら比較し、共通点と相違点を明らかにしています。

② **窪菌晴夫(2002)『新語はこうして作られる』** (もっと知りたい!日本語) 岩波書店.

新語のなりたちを読みやすく紹介しながら、その背後にある規則性を解き明かしています。クイズもついており、おもしろく読めます。

第5章 **文とは：統語論1** (小町将之・瀧田健介)

① **遠藤喜雄・前田雅子 (2020)『カートグラフィー』** (最新英語学・言語学シリーズ5) 開拓社.

統語構造から意味への橋渡しを明確にするという理論的目標のために統語構造の詳細な「地図(カートグラフィー)」を描写しようとするプロジェクトについて、その考え方と全体像がよくわかるように書かれた概説書。

② **立石浩一・小泉政利 (2001)『文の構造』** (英語学モノグラフシリーズ3) 研究社.

構造とは何か、なぜそれが必要なのかという問いを出発点に、生成文法理論の基本概念とその理論的変遷を押さえながら、平叙文・疑問文・命令文・感嘆文それぞれの統語分析を丁寧な解説している入門書。

③ 渡辺明 (2009) 『生成文法』東京大学出版会.

統語論の代表的な入門書. 英語と日本語を中心とした具体例の分析と, 仮説を修正するプロセスを通じて, 生成文法の研究理念や研究手法において重要なことは何かがよく理解できるように構成されています.

第6章 統語現象を考える：統語論2 (瀧田健介・小町将之)

① Andrew Carnie (2021) *Syntax: A Generative Introduction*, 4th edition, Wiley-Blackwell.

英語以外の様々な言語も対象とした比較統語論の入門書. 第4版からは, 併合に関する章も追加されています. また, 出版社のウェブサイトにおいて著者本人による動画解説や追加練習問題が提供されています.

② 村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介 (編) (2016) 『日本語文法ハンドブック——言語理論と言語獲得の観点から』開拓社.

日本語統語論およびその獲得研究についての主要なトピックが, 各章で比較的独立した形で解説されています. また, 各章はそれぞれ, 統語論の基礎を一通り学んだ読者を対象とした第1部と, より進んだ読者を対象とした第2部から構成されています.

③ 西垣内泰介・石居康男 (2003) 『英語から日本語を見る』(英語学モノグラフシリーズ13) 研究社.

日英比較統語論について, 基礎から発展的な内容まで, 一通りの内容を解説しています. 英語だけを見ていると気づかない言語事実が詳細に議論されており, 本格的な比較統語論の醍醐味を感じることができるでしょう.

第7章 意味とは：意味論1 (稲田俊一郎・猪熊作巳)

① Ronnie Cann (1993) *Formal Semantics: An Introduction*, Cambridge University Press.

モンタギュー意味論を基本からわかりやすく解説した入門的概説書。

- ② 郡司隆男・阿部泰明・白井賢一郎・坂原茂・松本裕治（1998）『岩波講座 言語の科学 4 意味』岩波書店。

語や文の意味についての解説から、形式意味論、認知的意味論の考え方で意味に関するトピックを幅広く紹介しています。

- ③ ポール・ポートナー（著），片岡宏仁（訳）（2015）『意味ってなに？——形式意味論入門』勁草書房。 [原著 Paul H. Portner（2005）*What Is Meaning? Fundamentals of Formal Semantics*, Blackwell.]

「意味ってなに？」という問いに平易な日本語で答えている前半部分が特にわかりやすいのではないのでしょうか。読みやすい英語で丁寧に解説してある原著にも、ぜひチャレンジしてみてください。

第8章 意味現象を考える：意味論2（猪熊作巳・稲田俊一郎）

- ① Irene Heimand Angelika Kratzer（1998）*Semantics in Generative Grammar*, Blackwell.

生成文法の枠組みにおける統語論研究の成果とモンタギュー意味論の考え方を融合させた本です。

- ② 田中拓郎(2016)『形式意味論入門』（開拓社叢書 27）開拓社。

統語論研究とモンタギュー意味論の有機的関係を理解するのに役立つ本です。巻末には実際の意味論研究での思考法も紹介しており、意味論分野の論文を読む参考になるでしょう。

- ③ Richard Larson and Gabriel Segal (1995) *Knowledge of Meaning: An Introduction to Semantic Theory*, MIT Press.

本書『言語研究の世界』では扱わなかったデイヴィッドソンの真理条件的意味論の概説書。

第9章 発話とは：語用論（瀬楽亨）

① Betty Birner (2018) *Language and Meaning*, Routledge.

意味論の基礎を踏まえながら、語用論の主要トピックについて簡潔な解説がなされています。本書第9章では触れることができなかった前提や指示の問題も取り上げられています。

② 西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘 (1999) 『岩波講座 言語の科学 7 談話と文脈』岩波書店.

談話分析的アプローチや計算的アプローチなど、様々な理論的立場が解説されています。第1章「語用論の基礎概念」は本書第9章の内容を正確に理解するためにも必読。

③ Deirdre Wilson and Tim Wharton (著), 今井邦彦 (編), 井門亮他 (訳) (2009) 『最新語用論 入門 12 章』大修館書店.

ロンドン大学 (University College London) の講義ノートを元にした関連性理論の入門書です。グライスの枠組みを踏まえた上で、語用論における認知的アプローチの有用性について解説しています。

コラム2: 統語と音のインターフェイス（塩原佳世乃）

① 田子内健介・足立公也 (2005) 『右方移動と焦点化』（英語学モノグラフシリーズ 11）研究社.

Heavy NP Shift など右側への転移を含むとされる構文について、本コラムでは触れることができなかった、「焦点 (focus)」の観点からの分析を呈示しています。まえがきにあるように、焦点化という効果を持つ構文は、「統語論、意味論、語用論、統語解析、談話文法などが複雑に絡み合った、きわめて興味深い領域」ですが、本コラムを読んだ読者には、「音韻論」もこの領域に加えられるべきであることが理解いただけるでしょう。

② Kayono Shiobara (2010) *Derivational Linearization at the SyntaxProsody Interface*, Hituzi Syobo.

線的順序をどう決定するかという問題を、統語と音のインターフェイスの在りよう、さらには言語運用と関係づけて、経験的、理論的側面から包括的に捉える試みです。特に英語と日本語の対応する例が豊富なので、議論をおいやすいのではないかと思います。

コラム 3: 統語と意味のインターフェイス (中尾千鶴)

① Martin Hackl (2013) “The Syntax-Semantics Interface,” *Lingua* 130, 66-87.

本コラムでも紹介した QR に関するデータや QR の分析を支持する更なる証拠が解説されています。

② Jason Merchant (2001) *Syntax of Silence*, Oxford University Press.

“John ate something, but I don't know what (John ate).”のような文で疑問詞の後ろの括弧部分が省略される「スルーシング(slucing)」と呼ばれる現象について、様々なデータに基づいて論じられており、他の削除現象の分析にも大きな影響を与えました。

第 10 章 言語の獲得 1 : 第一言語の獲得 (郷路拓也)

① 広瀬友紀 (2017) 『ちいさい言語学者の冒険——子どもに学ぶことばの秘密』(岩波科学ライブラリー) 岩波書店.

言語学者である著者が子育て経験の中で出会った様々な事例を基に書かれた、おそらく最も「とっつきやすい」言語獲得に関する本です。

② 杉崎鉦司 (2015) 『はじめての言語獲得——普遍文法に基づくアプローチ』岩波書店.

本章で取り上げた、生成文法理論に基づいた言語獲得研究とその成果についてより詳しく知りたい場合に推奨したい本です。日本語で、最新の研究成果まで広くカバーしている研究書は他に例がありません。

第 11 章 言語の獲得 2 : 第二言語の獲得 (磯部美和・平川真規子)

- ① Roumyana Slabakova, Tania Leal, Amber Dudley, and Micah Stack (2020) *Generative Second Language Acquisition*, Cambridge University Press.

生成文法理論に基づく第二言語獲得研究の入門書。L2 獲得においても UG が機能することや、L2 獲得における経験の重要性が論じられています。また、近年提案されている L2 獲得のモデルや外国語教育への示唆も紹介されています。

- ② 白畑知彦・須田孝司 (編) (2019) 『言語習得研究の応用可能性——理論から指導・脳科学へ』(第二言語習得研究モノグラフシリーズ 3) くろしお出版。 / 白畑知彦・須田孝司 (編) (2020) 『第二言語習得研究の波及効果——コアグラマーから発話まで』(第二言語習得研究モノグラフシリーズ 4) くろしお出版。

日本における近年の第二言語習得研究の成果がわかりやすく解説されています。幅広いテーマを扱った事例研究が集約されており、シリーズ 3 の近藤氏の論文と、シリーズ 4 の白畑氏らの論文では、本章で取り上げた過剰受動化現象が扱われています。

第 12 章 言語の運用 (大津由紀雄)

- ① Eva M. Fernández and Helen Smith Cairns (2010) *Fundamentals of Psycholinguistics*, Wiley-Blackwell.

平易に書かれた言語心理学の入門書・概説書です。言語心理学について概観しておきたいというときに便利です。言語の運用に関わるのは第 5 章から第 8 章までです。

- ② Bradley L. Pritchett (1992) *Grammatical Competence and Parsing Performance*, University of Chicago Press.

著者の博士論文をもとにした著作ですが、第 2 章に 90 年代初頭までの文理解に関する研究成果のサーベイがあり、研究史を踏まえた上で今後の課題を考えるときに参考になります。

- ③ Cedric Boeckx (2009) *Language in Cognition: Uncovering Mental Structures and the Rules behind Them*, Wiley-Blackwell. [セドリック・ブックス(著), 水光雅則(訳) (2012) 『言語

から認知を探る——ホモ・コンビナンスの心』岩波書店.]

言語運用だけに限らず，ことばを認知システムの一つとして捉えるということがどういうことを意味するかがわかりやすく解説してあります。

第 13 章 言語の変化 (宮下治政)

① 児馬修 (2018) 『ファンダメンタル英語史 [改訂版]』ひつじ書房。

英語史を社会的変化と関連付けて紹介し，英語史で起きた様々な統語変化に対して生成文法の立場から説明を与えています。予備知識を必要としない，英語史を題材とした言語変化の入門書です。

② Ian Roberts (2007) *Diachronic Syntax*, Oxford University Press.

1980 年代から蓄積された言語変化に対する原理とパラメータのアプローチの研究成果をさらに発展させ，様々なタイプの統語変化や統語変化の原動力，統語変化と言語獲得の関係を考察している研究書です。

第 14 章 言語の脳科学 (尾島司郎)

① Angela D. Friederici (2017) *Language in Our Brain: The Origins of a Uniquely Human Capacity*, The MIT Press.

言語脳科学を 30 年にわたり牽引してきた先駆者の集大成的な著書。脳機能，脳構造，進化に至るまで幅広く論じています。

② 酒井邦嘉 (2002) 『言語の脳科学——脳はどのようにことばを生みだすか』中公新書。

脳科学者が生成文法理論を研究に取り入れるという画期的な試みをわかり易く解説してあります。

第 15 章 言語の起源と進化 (池内正幸)

① 池内正幸(2010)『ひとのことばの起源と進化』(開拓社 言語・文化選書 19) 開拓社.

提案自体はすでに古くなっていますが, 生成文法の立場からの初歩的な入門書として十分な基本的情報量があり, また, 読み易く書かれています. まずはこれから読んでみましょう.

② 遊佐典明(編)(2018)『言語の獲得・進化・変化——心理言語学, 進化言語学, 歴史言語学』(言語研究と言語学の進展シリーズ 3) 開拓社.

やや難しいですが, 特に第 II 部「最新の言語進化研究と生物言語学の進展」の統語論の部分は読み応えがあります.

コラム 4 : 幼児言語と自己埋め込み (照沼阿貴子)

① Luiz Amaral, Marcus Maia, Andrew Nevins and Tom Roeper (eds.) (2018) *Recursion across Domains*, Cambridge University Press.

様々な構文の自己埋め込みについて, 統語, 音韻, 言語獲得, 言語処理などの観点から考察した論文 18 篇が収められた論集. 英語やポルトガル語などの他, ブラジルの様々な土着語 (indigenous languages) の資料が豊富で, 特に第 10~12, 14, 16 章では自己埋め込み構造の獲得が論じられています.

② 稲田俊一郎・猪熊作巳 (2015) 「再帰的场所表現の獲得について」『実践英文学』67 卷, 31-52.

場所を表す「の」を含む句 (たとえば, 「東京の映画館」の「東京の」の部分) の自己埋め込み構造の獲得について, 所有を表す「の」を含む句 (所有句) も視野に入れながら論じた論文です.

コラム 5 : 手話言語 (坂本祐太)

① 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版.

手話言語の音韻・形態・統語・意味に関する概観から、手話言語の発達および研究方法まで丁寧かつ幅広く手話言語学についての情報が掲載されています。

② 木村晴美 (2011) 『日本手話と日本語対应手話』生活書院。

本コラムではあまり紹介できなかった、日本手話と日本語対应手話の違いが数多くの例文および写真と共にわかりやすく説明されています。

コラム 6 : **少数言語の研究** (大滝宏一)

① 角田 太作(2009)『世界の言語と日本語——言語類型論から見た日本語』くろしお出版。

言語類型論の立場から、世界中の様々な言語の特徴が日本語の特徴と比較しながら論じられています。日本語で少数言語の世界に触れるにはもってこいの本です。

② 今西祐介(2020)『言語の能格性』ひつじ書房。

このコラムでも紹介した「能格・絶対格型言語」の特徴とそのメカニズムがわかりやすく紹介されています。後半の理論的分析は少々難解に感じられるかもしれませんが、この本を読んだ後にチャレンジしてみましょう。

③ Mark Baker (2001) *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*, Oxford University Press. [マーク・ベイカー (著), 郡司 隆男 (訳)(2003, 2010) 『言語のレシピ——多様性にひそむ普遍性をもとめて』岩波書店.]

様々な少数言語からの例を挙げながら、生成文法の枠組みでどのように言語間のバリエーションを説明するのか、言語間のバリエーションにどのような普遍性が存在するのかを述べられています。

終章 言語研究の展開と今後の展望

(稲田俊一郎・杉崎鉦司・磯部美和・大津由紀雄・池内正幸・今西典子)

① Noam Chomsky (2015) *The Minimalist Program (20th Anniversary Edition)*, MIT Press.

本書は 1995 年に出版された同名の本の冒頭に出版 20 周年を記念して 7 ページの「まえ

がき」を加えたものです。95年版は序説と4つの章（第1章はラズニクとの共著）からなり、ミニマリスト・プログラムの拠り所とされてきたものです。新たな「まえがき」ではその後の成果を踏まえ、Strong Minimalist Thesisの帰結について検討を加えています。必読書です。

- ② Daniel Leonard Everett (2007) *Don't Sleep, There are Snakes: Life and Language in the Amazonian Jungle*, Pantheon Books. [ダニエル・L・エヴェレット(著), 屋代通子(訳)(2012)『ピダハン——「言語本能」を超える文化と世界観』みすず書房.]

アマゾンの狩猟採集民ピダハン(Pirahã)についての野外研究報告である本書では第2部の「言語」でピダハン語の音声や語、文法について解説されています。特に、チョムスキーの考えと異なる第15章の recursion についての議論を批判的に検討しながら読むことは、人間の言語の本質について理解を深めることにつながるはずです。

- ③ 高野祐二・岡利房・浦啓之・多田浩章 (2021) 『移動現象を巡る諸問題』(最新英語学・言語学シリーズ2) 開拓社。

4つの論考からなる本書では、転移現象をどのように説明するかについて多様な分析とその帰結が示されています。各論考により、MPの最新の具体的な研究について概観できます。

- ④ Antonio Fábregas, Jaume Mateu and Michael Putnam (eds.) (2015) *Contemporary Linguistic Parameters*, Bloomsbury. / Luis Eguren, Olga Fernández-Soriano, and Amaya Mendikoetxea (eds.) (2016) *Rethinking Parameters*, Oxford University Press.

いずれもパラメータに関する近年の研究を多数収めた論集であり、生成文法における言語間変異についての研究成果を知るのに役立ちますが、読み進めるには一定の前提知識が必要です。

- ⑤ Jeffrey L. Lidz, William Snyder and Joe Pater (eds.) (2016) *The Oxford Handbook of Developmental Linguistics*, Oxford University Press.

音声・形態・統語・意味など言語のさまざまな領域の獲得に関して、それぞれの分野を専門とする研究者がこれまでの研究の成果をわかりやすくまとめて解説したハンドブックです。

事例研究 1: コーパスを使った言語研究 (深谷修代)

- ① 中谷健太郎 (編) (2019) 『パソコンがあればできる! ことばの実験研究の方法——容認性調査, 読文・産出実験からコーパスまで』 ひつじ書房.

パソコンを使って「言語に関する実験をしてみたい」, 「コーパスを使って言語データを収集してみたい」という読者におすすめの本です. 「語彙性判断課題」などの実験の章では, 実験の手順がわかりやすく説明されています. 第 8 章では, 「事例研究 1」で用いた CHILDES の丁寧な解説があります.

- ② 石川慎一郎・長谷部陽一郎・住吉誠 (2020) 『コーパス研究の展望』 (最新英語学・言語学シリーズ 11) 開拓社.

4 つの章からなる本書は, 主要なコーパスの解説のみならず, 「英語学」「英語語法」「英語教育」の分野からコーパスを用いた研究がわかりやすく紹介されています. 第 2 章 3 節には CHILDES を用いた研究の紹介もあります.

事例研究 2: 日本語と英語における結果構文とその関連構文 (阿部明子)

- ① 影山太郎 (1996) 『動詞意味論——言語と認知の接点』 (日英語対照研究シリーズ) くろしお出版.

第 5 章では, 英語と日本語の結果構文を比較・対照しながら, 概念構造による分析が提示されています. 動詞の意味について深く考えるうえで必読書のひとつです.

- ② 小野尚之 (編) (2007) 『結果構文研究の新視点』 (ひつじ研究叢書 言語編) ひつじ書房.

結果構文研究の論集です. やや専門的ですが, 結果構文の面白さに触れることができる 1 冊となっています.

- ③ 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文——生成文法分析の批判と機能的解析』 研究社.

機能主義的統語論の観点から，結果構文や Way 構文など日英語の 9 つの構文について詳細に論じています。生成文法における扱いについても基本的なことを学ぶことができ，興味深い例文が多く示されています。